

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



霊丘自然植物園では、1種類の苗をスタッフみんなでわけ、それぞれが4~5通りの方法で育てている。

Contents

名古屋写真展報告	P 2
夏のワーキングツアー日誌から	P 4
富士ゼロックス端数倶楽部ツアー報告	P 6

2001.9

81

写真展『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』報告 誇りをもてる活動を広げる楽しさ実感

宮崎 いずみ (GEN世話人)

7月27日から8月2日まで、JR名古屋駅中央コンコースイベントコーナーにて、橋本紘二さんの写真展が開かれました。駅を中心に、高島屋の前という絶好の立地条件で、老若男女、1日平均約6,000名の方がお越しになりました。ボランティアには東京の小畑さんの小学校の同級生の方とそのお友達、橋本さんのカメラ仲間の方、ジャスコの方、サントリーの方など、さまざまな方にご協力をいただきました。また、カンパは約1万5000円、絵葉書は366セット、写真集は30冊の売上がありました。

お客さんはおそらくほとんどが通りすがりの方だったと思われそうですが、はじめに黄土高原の現状に圧倒され、そ

のあとに植林活動の写真で足を止める姿が多く見受けられました。

販売コーナーでは、リーフレットを指して「どうぞ、お持ちくださいーい」と何かいいものでも置いているかのように叫んだところ、たくさんの方が資料を眺めて、抵抗なしに取っていただきました。その後、展示とリーフレットを見た後にカンパをくださる方が多かったです。今までこのような活動の宣伝には、どこか腰を低くしてお願いするような感じがあったのですが、これからは、この活動から楽しみを得られる、その機会を提供している、そういう自信をもっていくことが新たなNPOの形を作っていくように思います。

そして、橋本さんの写真は、単に黄土高原の現状を伝えて、協力の必要性を訴えるというだけのものではなく、その協力の楽しさを感じ取るひとつの手段と言えるでしょう。自分と違う生活を知り、そこと何らかの関係をもち、間接的であるにしてもつながっている「縁」を感じながら黄土高原の写

真を見れば、深刻な現実だけではなく、自分の心に楽しさ、誇りも感じる事ができるのではないのでしょうか。緑の地球ネットワークに関わるものとして、そんな自信と楽しみを噛みしめることができた1週間でした。

* * * * *

★写真集『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』好評発売中！

写真・文＝橋本紘二／東方出版／A4版・208ページ／6,000円＋税／日本図書館協会選定図書

※緑の地球ネットワークでも扱っています。特別価格（送料込み）6,000円。お申し込みはGEN事務所まで。
※たくさんの方に見ていただけるように、学校や地域の図書館などに購入希望を出してください！



関東ブランチからのお知らせ

6月に東京でおこなった創立10周年記念シンポジウムの際に、橋本紘二さんがGENの活動紹介の写真パネルを7枚製作してくださいました。せっかくだから活用しようと関東ブランチで話しあい、まずは国立市で開かれる「環境フェスタくにたち」に参加することにしました。

国立の市民団体などが参加して、リサイクル品販売、パネル・環境グッズの展示、食品販売、子ども対象の環境関連の講演などがおこなわれます。

GEN 関東ブランチは、写真パネルの

展示（10月1日から当日朝まで国立市役所のロビーでも展示します）、大同の切り絵の販売、写真集他関連書籍の販売、人形劇（今年の春のワーキングツアーから始まった「虎の威を借る狐」の日本語版など）などを催す予定です。秋の1日、お近くの方はぜひ足を運んでみてください。

★「環境フェスタくにたち」

●日時：10月13日（土）10時～16時

※雨天決行

●場所：国立市民芸術小ホール前広場

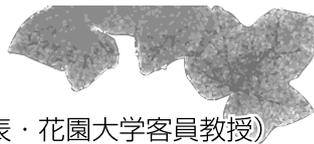
（国立市富士見台2-48-1。JR中央線国

立駅南口バス乗場4番、矢川駅、国立営業所または都営いずみ2丁目行き「市民芸術小ホール・総合体育館前」下車、またはJR南武線谷保駅から線路沿い立川方面へ徒歩10分

●主催：国立市・環境フェスタくにたち実行委員会（国立市ごみ減量課内、TEL.042-576-2141～143）



植物を育てる (13)



立花 吉茂 (GEN代表・花園大学客員教授)

●苗を育てる目的

緑化のための育苗と林業のための育苗はスタートの時点で異なっている。林業の場合は、収穫時に商品としての価値の高い品種、系統を用いる。時にはクローンさえ使用する(北山杉の挿し木苗)。しかし、緑化のためなら、いきなり極相の樹種多数を集めても良いし、条件が悪ければ先駆植物や、場合によっては草本まで集めて蒔くことにもなる。したがって「木の苗を育てる種子を蒔けば良い」というような単純なものではない。まず、元の植生を把握してその植生の種子を集めねばならない。西日本の場合であれば、少なくとも30種以上の組み合わせになるだろう。遺伝子の多様性を考慮して、地元の樹種の種子で不足なら、なるべく地元から近い地域の種子を集める。また、優占樹種と希少樹種との割合などを考えた育苗本数を考えておく必要がある。人類は途方もない面積に植林をしてきたとはいえ、たった数種の樹種であり、数十種、数百種の天然の植生の組み合わせの植林をやった経験がない。かつて、大阪市立大学の植物園に

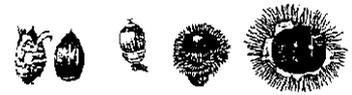
いたとき、ドイツから来たプラント・ハンターが、12型の樹林型造成の仕事を見て「うーむ、これは人類最初の事業だ」といたく驚いていたことがあった。だから緑化の計画は極めて慎重にやらねばならないのである。

●種子を集める

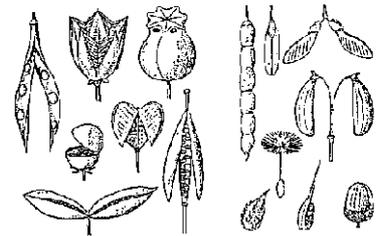
計画はできたが、さて種子を集めるとなると、どの種類は、いかなる形の種子なのか、いつ頃成熟するのか、どのように調整、貯蔵したら良いのか、いつどこにどのように蒔けば良いのか、移植傷みはないのか、などなど、ほとんどデータがないのが実情である。データのあるのは栽培植物だけである。野生種で実験的にある程度発芽のクセが明らかになったのは、クスノキ科、モチノキ科、ウルシ科、ブナ科、マメ科、ミカン科、アオイ科および若干の先駆植物たちである。これらの樹種だけでも、1種ずつこのクセを把握するのは大変である。そこで、図を見ていただく。これでおおざっぱに、取り扱い方の違いによるグループ分けができる。乾果たちは普通の種子のように乾かせて蓄えればよいが殻斗果や液果

は貯蔵方法が難しい。以下次号で紹介しよう。

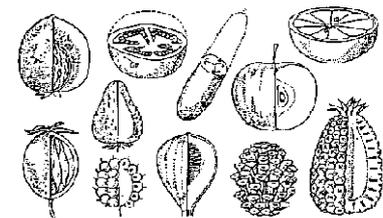
野生植物の種子発芽の型



殻斗科の種子発芽.....発芽は早い。低温と中温。寿命は短い。



乾果の種子発芽.....発芽は遅い。高温。寿命は長い。硬実型。



液果の発芽.....発芽は遅い。低温高温。寿命は中ぐらい。休眠型。

写真展『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』大阪で開催!

京都、名古屋につづいて、大阪でも橋本紘二さんの写真展開催が決まりました。会場の関係で少し小規模になりますが、ギャラリーですので落ち着いてじっくりとご覧になれます。黄土高原の自然環境、人びとの生活、緑化協力のようなすを見事に写し取った橋本さんの写真にふれるチャンスです。お気軽にお立ち寄りください。

- 日時：10月26日(金)～11月1日(木) 10時～19時
- 場所：JR大阪セルヴィスギャラリー (JR「大阪」駅中央コンコース)

- 入場無料
- 主催：読売新聞大阪本社／読売テレビ／JR西日本
- 協賛：緑の地球ネットワーク



黄河の断流がはじまったのが1972年。その後、1999年には年間226日、河口から700kmまで干上がってしまいました。問題の深刻さに対策が講じられ、最近では断流こそ報じられませんが、それでも黄河の水量減少が深刻であることに変わりはありません。

GEN顧問の小川先生が、その現状を

確かめようと黄河の旅を企画され、第1回目として8月下旬に下流域を見てこられました。リアルタイムの黄河事情を、スライドをまじえて語っていただきます。

- 日時：10月1日(月) 18時30分～20時30分
- 場所：大阪市立弁天町市民学習センター (TEL. 06-6577-1430.環状線、地下鉄中央線「弁天町」すぐ)
- 講師：小川房人さん (GEN顧問、元大阪市立大学付属植物園園長)
- 参加費：700円



干ばつに負けず、大きく育て……

夏のワーキングツアー一日記から

今夏は、7月26日から8月2日の日程で、6歳から70歳まで27名の参加者が大同を訪れました。春に植えた苗が早魃でありよく着いていなかったため、ポット苗をつかってたくさん補植をしました。ツアーの日記から一部抜粋してご紹介します。

【7月27日（金）】

●朝食のあと、ツアーとしては初めての左雲県楊千堡郷の造林地に行く。ごくゆるやかな丘の上に今春植えたあとがうかがえるが、1～2割しか活着していないようだ。

地元の小学生や村人と協力してアブラマツのポット苗を植えていく。すでに1度植えたところだから保水のためうね、溝は作ってあるので、穴を掘るのも楽だ。

午後は常家場郷大西梁および西溝村の造林地を見学した。うまくいっているところを見せてくれたということもあるだろうが、喬木（アブラマツ、モンゴリマツ）と灌木（サージ、ムレスズメなど）が混植しており、なかなか、智恵を出しているように見うけた。

今年は「百年に1度の早魃」ということだが、畑には「緑色」はまばらではあるが見られるので、予備知識がなかったり、農業を知らなかったりすると、ポプラやマツはよく育っているし、畑には大きくはないが作物が育っているのが早魃だと不思議に思うのではなからうか。（池本和夫）

●生まれてはじめての寝台列車、思っていた以上にきれいで快適で、修学旅行みたいで楽しいかも……。私は2段ベッドの上で寝ていたのだから上からいろいろなものを落とし、下の人には迷惑

をかけてしまいました。ごめんなさい。

（中略）バスの中ではウトウトしてしまい、目が覚めた時には別世界。ガタガタの山道の向こうには、色とりどりの旗と、可愛い子どもたちの出迎えがあり、感動しました。

歓迎式の後、いよいよ植林です。はりきってスコップを持ち、穴を掘ろうとするのですが、なかなか掘れず、それをみかねた村の方が手伝ってくれ、無事1本目を植えることができました。自分の体力のなさががっかりでした。村の人びとにとっては、はじめての日本人にもかわからず、親切に接して下さることに感謝。まだ2日目です。最後まで無事に皆さんについていけるようがんばります。（岩屋亜紀子）

【7月28日（土）】

●はじめての中国。なにもかもにおどろきの連続です。トイレに、交通ルールに、景色に、中国の人びとに。最初はいろんなことをまなびたい、中国の人とたくさん友達になりたい、という希望をもったのに……。現状は中国の生活になじむだけでいっぱいです。

中国の人とも話は全然できない。ただひとつ救いなのは、中国の人が本当にやさしいことです。言葉はつうじなくても、笑顔でやさしく接してくれるのは本当にうれしい。子どももすごいかわいい。

明日は農民の人たちの所へホームステイする日です。不安と楽しみでドキドキ。今日は眠れるかな……。 （柏史奈）

●今日は、午前中植林、午



明代の岩跡。かつては兵が駐屯したが、いまは村になっている

後長城をみるという予定。朝出発して、順調に現場に着くと思いきや、途中で悪路のため車に分乗、私の乗った車はサンタナ。空調はあるはずなのに非常に暑い。20分かけてようやく現場へ。昨日のような大がかりな歓迎ではなく、こじんまりしたものだった。近所の小学生・中学生と、おばさん、おじさんが一緒に協力、植林をしながら現地の人と語るのが楽しい。年齢をきいたりするだけで、その場がなごむ。これも日中交流のひとつのあり様かなとも思った。昨日とちがって今日は2時間弱の作業。ときおり話をはずませながら、楽しんでできた。この木がぜひとも成長してくれることをねがって現場をはなれた。（村松弘一）

【7月30日（月）】

●ホームステイ先の朝は早かった。5時半頃起床。ホームステイ先のおじさんは既に水汲みを終え、まだ涼しいうちに農作業をしようと言ってでていった。

時間がゆっくりと流れて、日本のあわたたしさがウソのようだ。朝食までの間村の中をぶらつく。村人に会うと、はにかんだような笑顔を返してくれた。

午前中の植樹作業も楽しかった。スキー用サングラスが珍しいらしく、子どもたちに顔をのぞきこまれたり、周りをうろろうろされたり。サングラスをはずして子どもにつけてあげると、嬉



干ばつの畑。平年なら、一面緑色になっているのだが……



また作業～? といいながら、慣れてきたの作業がはかどる

しそうな笑顔。「次は僕だ」、「いや僕だ」という感じで押しあいになり、こんなに子どもに囲まれるのは、はじめての経験で面白かった。

午後は、その村の上流で、午前中植樹したところと隣りあわせの「かささぎの森」へ行き、植林。今回のツアー参加者も（私も含め）植林慣れしてきたのか、いつもにまして作業がスムーズに進んでいるように感じた。

（中略）自然環境の厳しいところだが、村の子どもたちは素朴で人なつっこく元気だ。村の大人も、元気な子どもに囲まれ、幸せそうだ。元気なたくさん子どもたちと広大な黄土高原が印象に残った1日でした。（金子哲郎）

●朝食後、張さんと隣の家の女の子と町を散歩。通りで出会ったおばあさんはUFOにでも遭遇したかのようにアングリ口を開けて、茫然と私たちを見つめる。一面の褐色の世界。静かで小さな町。彼らはおそらく生まれてこのかた、ずっとあたり前のこととして、この閉鎖的な環境の中で暮らしているだろう。北京、上海といった大都市、大同でさえもはるか遠いところにある。

午前は聚楽郷采涼山の“地球環境林”、午後は“喜鵲林”で作業。けっこう働いた。と言ってもそれぞれのプロジェクトのほんの爪の先くらいのことである。しかしそれで良いと思う。今回の私たちの旅はGENの活動の一種象徴だろうから。共に手を携えて樹を植えたことを、日中双方がそれぞれ記憶に残せば良い。そしてそれを友人なり知人なりに伝えていけば良いと思います。

現在公の部分での日中関係はあまり良くない。だからこそ民間での外交は

大事。環境だけに限らず、文化でも教育でも、それぞれができることをできる範囲で進めていきたいですね。たとえ旅行先で一緒に写真を撮って相手にプレゼントしたり、笑顔であいさつしたり、握手したりといった簡単なことでもよいと思います。必ず広がりを見せ、また次世代にもつながっていくことと思います。（辻直美）

直美)

●とにかく言葉が通じにくく、こちらの普通話が大人には通じて子どもたちには理解してもらえず、その大人にしても、彼らが話す言葉が全くの地元言葉で参った。今日午後喜鵲の森で作業していたときに集まってきていた子どもたちは大同市内の子どもで、夏休みなので祖父母の家に来ていたものらしいが、あの子どもたちの言葉が非常に標準的な言葉であったのとは全く違うのには驚かざるをえない。こんなわずかな距離の差で教育のレベルにこのような開きがあるとは思いがけない。たずねると、聚楽郷の小学校の先生は授業も土地の言葉でしているらしい。昼食の時に党の書記の方からこの郷の教育レベルの向上が何よりの課題だということ聞いたが、本当にその通りだと感じた。（森田浩一）

【7月31日（火）】

最初、大同での生活は、正直「ついていけないかも……」と思った。でも人間、環境に適応する能力は高く、今では“かなり”大同の生活にもなれたと思う。あんなに抵抗のあったトイレの問題も、お腹をこわしてしまっても何十回と通ったせいか“すっかりなれて”しまった。

（中略）沢山、た～くさんの貴重な体験をすることができた。でも、一番貴重な体験は、やっぱり現地の人たちとのコミュニケーションだと思う。

今回は全然うまくいかなかったけれど、もしか

すると一生会うことのなかった、そこに住み、生活している人たちとの交流。もし“次”があるならば、その時こそ農作業を現地の人たちと“楽しく”過ごせるぐらいになりたい。（石川雅幸）

【8月1日（水）】

●中国最後の夜に久し振りにペンをとることになり（今までは軍手にスコップ）思いは出発から今までの……というよりは、やはり大同に早朝到着して昨日夜行に乗り込むまでの約5日間の出来事が次つぎにめぐってきます。

なにもかもが生まれてはじめてのことばかりで、これらのことが感動とかいう言葉であらわせるものではなく、色いろなことを私に教えているような問いかけているような、思い返してみるとそんな日々でした。

（中略）明日はいよいよ日本に帰ります。今日の朝、北京の町に着いた時点でもうこの旅の終わりを告げられた気分です。スタッフの方がたやこのツアーで出会えたみんなに感謝の気持ちでいっぱいです。

いつかまた植えた木々の成長をこの目で見られますように。（上村聡子）

【8月2日（木）】

●われわれの植え木作業の真似ごとに付き合ってくれた子どもたちはおそらく現地の選抜された子どもたちでしょうが、彼らの木を愛し、緑を大切にする思いをこれからも継続して助成する環境を大切にしたいものです。



子どもたちに見守られながら苗木を植える



作業の合間に綱引き。男性、女性とも1対1の引き分けでした

ることはできないでしょう。しかしこれを続ければ、あの時手伝ってくれた子どもたちがその子どもに言うでしょう。あの森は君のお父さんが日本から来た人たちと一緒に植えたのだと。(加藤明)

●きびしい自然環境だけど、雄大で美しい黄土高原。泊めていただいた農家に集まってきたたくさんの子ども

この植林運動の成果をわれわれは知 たちの笑顔、真夜中に見た満天の星空、

広場でアイスクリームをくれた男の子。植林に出かける前、道で村人に驢(ロバ)は日本語では何て言うんだと尋ねられて、漢字の苦手な私が苦しまぎれに手帳に「兔耳馬」(ウサギ耳の馬)と書いて見せたら、大笑いしていたおじいちゃん.....。

たくさんのおみやげ(思い出)をもって日本に帰ります。ありがとう村の人たち。ごくろうさまでしたツアーのみなさん。さようなら、黄土高原。再見、中国。(福田和義)

厳しい環境、暖かいもてなし

～地球環境問題を実感～

児玉 真里 (富士ゼロックス端数倶楽部)

GENのツアーと入れ違いに、富士ゼロックス端数倶楽部のツアー16人が、8月1日から7日まで大同を訪れました。参加者の1人に手記を寄せていただきました。

富士ゼロックス端数倶楽部のメンバーとして黄土高原ワーキングツアーに今回初めて加わせていただき、植林作業と農村でのホームステイを体験した。

大同は黄土高原の入り口で、北京から300kmほど内陸に行っただけなのにすでに砂漠化の最先端の地である、と事前にきいていたものの現実にこの目でみるまでは想像もつかなかった。しかも今年は春から全然雨に恵まれずに大地は乾ききり、木や作物の生育に大変厳しい状況であるときいた。

実際にアンズや松の植樹を体験したときカチカチに干からびた黄色い土に触れて実感した。現地の村の人びとや子どもたちに手伝ってもらいながら慣れない手つきで作業をはじめたが、教えられたとおりに穴を掘ろうとしても長い間水を含んでいない土は生半可な力ではまったくスコップが入っていかない。苗に土をかぶせ、注いだ水が土にしみ込んでいく様を見ながら厳しい環境ではあるがなんとか育てほしいと願った。

GENの高見事務局長が、植える苦勞など管理し成長を見守る苦勞の比ではないと言われた。本当に日本のように木は植えれば勝手に育つような環境で

はない。今年はさらに困難を極めるだろうが、「このようなときこそ、これまでのやり方を見直し改善するチャンスでもある」と前向きに語られているのが印象的だった。これまで植林してきた木々が成長した様子を見学させていただき、自分たちが植えた小さな細かい苗が背を伸ばし太って大地に根付く様を想像した。ぜひ元気に育てほしい、また再びこの地を訪れ成長した木々に会いたいと強く願わずにはいられない。

ホームステイした中高庄村の人たちは私たちが暖かく迎え入れてくださった。テーブルいっぱい並べた料理や、ビールやお酒でおもてなしをうけ、「チーバ(食べなさい)、フーバ(飲みなさい)」とひっきりなしにすすめてくれた。言葉がわからないという心配は杞憂であった。ここで農村部の生活を体験し、人の生活にとって水がいかに大切なものであるか、水道の蛇口をひねれば自由に水が使えることの幸せを実感した。また、新しいモノや便利なモノに囲まれて暮らしていることだけが幸せではないという、

なにか目に見えない大切なことを思い出させてくれるような貴重な体験だったと思う。

今日地球環境問題については、様々なことがメディアを通して報道されている。しかし日本にいて毎日の生活の場でこれらの問題を実感できるようなことは少ない気がする。今回植林活動を通して自分の目で見て体験することで得たものは大きいと思う。語り尽くせない思いでいっぱいであるが、大同で体験したすべてが心の宝となっている。

たまたま目にとめたワーキングツアーの案内に興味をもち、迷いながらも参加を決めた。今、参加できて本当によかったと思っている。植林活動に協力したというより、逆に多くのことを学ばせていただいた。またこのツアーが実現されるためには、GENの皆さんはじめたくさんの方々のご協力があったことだと今更ながらひしひしと感じている。これらすべての方々から感謝したい。



カササギの森にご協力ください!



2001年夏のカササギの森。貯水槽、管理棟などが完成した

昨年秋から開始したカササギの森は1年近くが経過してみなさんからの協力金は86h分となりました。ありがとうございました。ご協力の単位は1ha分5万円ですが、なかにはグループで少しずつ出し合って1ha分として協力して下さる場合もあります。

今春から植林を開始しました。現地はすでに管理棟、貯水槽、道路などができあがりしました。約10名の人が作業に従事しています。今年の旱魃で谷底の水が一時涸れるなど影響がでていますが、秋になって雨も降りをはじめ来年の準備がはじまっています。

借り上げた土地は約600haで、そのうち植林可能な土地もまだまだ広大です。ひき続きのご協力をお願いします。

【カササギの森】

大同県北部の聚楽郷麻地

溝の土地の50年の使用権を購入し、カウンターパートの技術者を中心に日本の専門家のアドバイスを受けながら植林をします。ここでは灌木との混植や他から導入した樹種などの植林も試みます。条件が整えば中国内のボランティアも受け入れたいと考えています。

1ha5万円で植林の協力金（苗木代、労賃、5年間の管理費を含む）を募集しています。

協力していただいた方には協力者証をお送りします。現地の記念碑に協力者の氏名を書き入れます。生育状況を5年間写真でご報告します。

黄土高原史話 <3>

アンダーソン『黄土地帯』から始まった

谷口 義介（摂南大学教授）

中国の考古学には、今でもアンダーソンの『黄土地帯』から入るのが常道。原名は“大地の子”ならぬ『黄土の子ら』。

193年にスウェーデン語で出版されて、34年に英訳。わが国ではこの英訳本にもとづいて、松崎寿和氏が42年に上記の名で翻訳・出版。当初より名著の誉れ高く、その後も影響力が強かったことは、松崎氏自身の『新黄土地帯』（60年）、賀川光夫氏の『黄土地帯紀行』（84年）という書名や内容からも分かります。

「黄土という怪奇な台地に中国大陸最古の人類文化が眠っている」（新版『黄土地帯』カバーの惹句）。

黄土高原は確かに「怪奇な台地」、何ともロマンに満ちています。

191年、北京政府の鉱政顧問として訪中したアンダーソンは、地下資源の調査に従いつつ、せっせと内職(?)に励みます。山東省で恐竜の化石、黄河沿いで象や三趾馬の化石を採集。ついには北京郊外の周口店洞穴でシナン

トロプス・ペキネンシス、河南省仰韶村では新石器時代の土器と住居址。いずれも画期的な大発見です。

仰韶村で見つけたのは、いわゆる彩陶と呼ばれるもの。アメリカのペンパリー探検隊が1903・4年、トルキスタンのアナウ遺跡で収集した彩文土器とよく似ています。そこで彼(=中国文明西方起源説)は、こう考えました。“西アジアの彩文土器が中国に入ってきたと仮定すれば、その痕跡は中国の西の玄関口に残っているはずだ”、と。

1923年、アンダーソンは荷車に揺られて遙か甘粛省へ旅立ちます。河南から西へ、潼関を通過して西安・平涼・蘭州へと（私はこのコースを列車とマイクロで行きました）。

「このルートは、中国でも最大の黄土地帯を横断している。わたくしが心をひかれたのはこの黄土高原だった。というのは、河南省での経験から、仰韶文化が黄土地帯と密接な関係をもっていることを確信していたからである。」

甘粛でアンダーソンは「仰韶期以前」のものを含む多数の彩文土器を採集・購入（写真）。仮説は実証されたかにもえませんでした。しかし、その後の精密な土器編年により、甘粛の土器は仰韶出土のものよりむしろ新しいことが判明。追い討ちをかけるように、仰韶より更に古い土器が河北省の磁山・河南省の裴李崗遺跡（共に前6000年頃）で見つかります。

しかし、農耕がはじまった新石器時代の文化と黄土地帯の密接な関係は、まさしくアンダーソン指摘の通り。

“Children of the Yellow Earth” が活動を始めるのは、この新石器時代からです。





第28回連続公開セミナー
EUにおける地域の温暖化対策

- 日時：9月25日（火）18時30分～20時45分
- 場所：ウイングス京都セミナー室B（地下鉄烏丸線「四条」駅、阪急京都線「烏丸」駅から徒歩5分）
- 講師：白石克孝さん（龍谷大学教授）
- 参加費：一般＝500円
- 主催・問合せ：気候ネットワーク（TEL. 075-254-1011 FAX. 075-254-1012 e-mail: kikonet@jca.apc.org）

鶴見緑地自然フェスタ
自然と遊ぼう

- 日時：9月29日（土）10時～16時
- 場所：鶴見緑地公園内 花の谷・花栈敷、大阪市立環境学習センター
- 【第1部】10時～16時
- ★花の谷・花栈敷でラリー、木の実などをを使った工作、環境人形劇など
- 【第2部・講演会】10時～12時
- ★“自然とは何か・生態系の仕組み”
- 場所：大阪市立環境学習センター

- （生き生き地球館）研修室
- 講師：山本博昭さん（大阪シニア自然大学）
 - 定員：50名（無料）
 - 主催：（特活）大阪NPOセンター・大阪環境ネット
 - 問合せ・申込み：大阪NPOセンター（TEL. 06-6361-5307 FAX. 06-6314-9486）

見て、聞いて、体験して、理解する、
国際協力のお祭り
ワンワールドフェスティバル

- GENも活動紹介に出展します。ぜひ遊びにきてください。
- 日時：10月13日（土）11時～18時、14日（日）10時～17時
 - 場所：大阪国際交流センター（地下鉄「谷町9丁目」駅、近鉄「上本町」駅下車）
 - 主催：ワン・ワールド・フェスティバル実行委員会（関西国際交流団体協議会内、TEL. 06-6773-0256 FAX. 06-6773-8422 e-mail: onefes@hotmail.com）
 - 入場無料
 - 【シンポジウム】13日14時～16時
「世界をつなぐ人づくり」明石康さん、樋口廣太郎さん

- 【パネルディスカッション】
- ▼「ここが変やで、関西！」13日12時～14時30分
 - ▼「草の根の声～アジア・南太平洋の村の青年のそれぞれの試み」14日11時～13時 など
 - 【活動紹介展】関西のNGOやその他の団体の活動をパネルなどで紹介。その他、世界の料理の屋台や、文化体験、音楽や舞踊の舞台など。

第3回日中名曲コンサート
葉衛陽
中国琵琶リサイタル

- 日時：10月20日（土）開場18時、開演18時30分
- 場所：京都府民ホール・アルティ（地下鉄「今出川」駅南へ徒歩5分）
- 出演：葉衛陽さん（中国琵琶）、川口容子さん（ピアノ）、小林幸男さん（解説）
- 演奏曲目：梁山伯と祝英台／さくらさくら／春の海／十面埋伏 など
- 前売り 3,000円、当日券 3,500円
- チケット取り扱い：京都府民ホール・アルティ（075-441-1414）アラットウェル（075-722-9147）長城楽団（075-592-6680）